



作り手の思い

山香荘茶園（藤川）
石山貴美夫さん

お茶は「一期一会」の飲み物 私たち携わる者こそ「自信」を持って届けたい

一番茶時期でなくて良かった

検査の結果を聞いて、家族全員が安心しました。県は今回、とても適切な対応をしてくれました。これも、新茶のかき入れ時に検査が入っていたら…。どの茶農家も、卸し業者も、販売店も、大きなパニックに陥っていた可能性があるんです。新茶時期というのは、どこも精いっぱい力を出し切っている状態

です。みんな100割どころか200割の力で頑張っている。そんな時期なんです。

このタイミングで、仮に検査をすることになったり、万一、出荷停止や返品という事態になったりしたら、大きな打撃を受けたと思います。足柄茶産地では、実際にパニックに陥りました。新茶の一番忙しい時期に検査が入り、出荷規制、回収という最悪の事態に発展してしまつた。商

品の形になった物を回収して処分するわけですから、損害はどれほどでしょうか。足柄茶産地の茶農家さんたちの落胆ぶりが目に浮かぶようです。

今後静岡県では、2番茶でも検査を進めていくというところで、時間がたつにつれ、徐々に放射性物質の数値は下がっていくと思います。国・県では積極的に検査を進めて、川根茶の、静岡茶の安全を証明して欲しいです。少しでも

早く、この事態が収束してくれることを願っています。お茶は癒しやくつろぎを与えてくれる飲み物。だからこそ、湯飲みの中を覗いた時「放射能」のような危険なものを想像してほしくないんですね。最近では、肥料を入れていても、お茶の刈り均しをしていても、どうしても放射能のことが心配になります。疲労も倍になる感じです。

川根茶というブランドに誇り

お客さんの中には、放射能を心配される人もいますが、データを元に説明すれば分かってくる人がほとんどです。元々、川根茶を気に入ってくれ、信頼して買ってくれるお客さんたちなんです。

川根茶というブランドは、5年や10年で培われてきたものではありません。山の中で作られた品質の高いお茶というイメージは、長い長い年月をかけて作り上げられてきたものなんです。だからこそ私

たち茶農家は、この自然を生かし、先輩たちの技と情熱を受け継ぎながら、思いを込めることができるんです。

町外から来た人は、よく「こ

こは本当に山の中だね」と言うんですが、これは最高の褒め言葉だと私は思っています。川根茶にとって、最高の環境が「この町」にはある。だから私は、湯飲みに注いだ一杯のお茶の中に、茶畑や山々など、この自然豊かな背景まで見えるような「茶作り」をしていきたいと思っています。

自信を持って「安心」を届ける

自分たちが誇る川根茶。安全であると証明された今、迷いなく、自信を持ってお客さんに勧める姿勢が必要です。電話をしてくれたお客さんは、私たちの声色一つで、安全かどうかを判断しています。私たちが自信を持つ。そしてその声をお客さんにちゃんと届けてあげる。そういった意識が大切なんだと思います。

一杯のお茶は「一期一会」。茶作りは、その年の天候などによって毎年変化します。肥料の調整や茶刈りのタイミングも違う。ですから、できあがったお茶も一つとして同じものではなく、全て大切な出会いなんです。私たち茶農家のそんな思いこそ、飲む人に届いてほしいと思います。

風評被害以上に大きな問題が

神奈川県で茶の規制があった頃から、少しずつ販売に影響が出てきた気がします。それでも今の段階で調査をして、安全が証明されたのだから、逆に言えば良かったのかもしれない。これも、夏場にあの放射能事故が発生していたら、来年の一番茶に影響したかもしれない。そう考えるとぞつとします。

私のところには、お客さんからの不安な声というのはそれほどありません。でも、実はそれ以上に多い声があるんです。「うちはお茶をやるから、上中さんのところでやってくれないか」という地元農家の声なんです。

その人が丹精込めて作ってきた茶園を手放すのがどれほどつらいことか。私も自分のできる範囲でしかやれませんが、そんな話を聞くと本当に

「高齢化」「後継者不足」「茶価の低迷」など、さまざまな問題が、この地域にはずつとありました。それが、今回の放射能事故が発端となって、より大きな痛手としてこの地域に襲いかかってきているよ

うな気がするんです。

川根茶に携わる茶農家たちが、この事故や風評で気落ちして、茶を廃業したいと思う。そんな「気力の減少」こそ、この地域の茶業に一番心配なことではないでしょうか。

他県の野菜農家が廃業を苦に自殺してしまうという痛ましいニュースがありました。それを見たとき、亡くなった農家の方の気持ちが痛いほど分かつたんですね。農家にとって、農作物は生活の糧である以上に、その人の人生を費やした「生きがい」でもあるんです。だから、自暴自棄になるのも分かるんです。

町に作り手がいなくなれば、川根茶そのものが消えてしまいます。一度気力を失ってしまった茶農家が、もう一度やる気を起こすのは並大抵のことじゃないんです。

行政の制度としては、荒廃農地の再整備への補助はありますが、もつと抜本的な対策が必要な時期に来ている気がします。荒廃農地を直すのではなく、荒廃農地にさせないことが大事なんです。農家が農家を続ける「気力」を失わせない手立てが必要なんです。

先日、静岡の茶小売店に立

あくまで自然体で茶作りに励んでいきたい 茶農家たちの「気力」をこそ守るべき

ち寄りました。店員は誠実な態度で、すごく自然に安全性を説明してくれ、私は安心してお茶を買うことができたんです。「ああ、今の自分たちに必要なのはこういうことだな」と思つたんですね。

必要以上に不安がるのではなく、あくまで自然体で、今まで通りお茶作りに励む。お客さんに、そんな気持ちまで伝わると思いますよ。

茶を生かすための農業

私は川根茶と共に野菜も作っています。これまでは「茶に変わる作物を」という意識がありました。でもそうではなかったんです。

「茶を生かす」ために、ほかの作物があつたんですね。

たとえば、脱穀後のソバの茎を茶園に敷く。草は生えな

茶価が厳しくても、ほかで収益を確保する。そんな風作物を共存させることで、川根茶を守っていきたいんです。

茶工場で茶を揉んでいると、年甲斐もなくワクワクします。やつぱり好きなんです。お茶が。この町で、ずつと川根茶を作り続けていきたい。今回の一件を通して、そんな自分の強い「思い」に、改めて

気がつくことができました。

川根朝霧園（徳山）
上中通寿さん



作り手の思い

川根朝霧園（徳山）
上中通寿さん